

# 立命館大学 大阪いばらきキャンパス



まちづくりの核となる公園と一体化したキャンパスで行われた学生と市民の交流イベント

review

## 選評

サッポロビール工場跡地一・二杉のうち一・五杉を防災公園、一・五杉を市民開放施設、九杉を教育施設、体育施設にあて、動線や建物配置の軸を既存都市と合わせて周囲に開いたキャンパスである。茨木市、立命館大学、UR都市機構の官民が一体となって、防災公園とそれをL字に取り囲む形で、ほとんどその境界が分からないような「地域・社会に開かれたキャンパス」として整備された。大学としては三学部四研究科六、〇〇〇人(現在は、四学部五研究科七、〇〇〇人)の学生たちが学ぶと同時に、大学内に商工会議所(日本国内初のキャンパス内設置)、産学共同研究施設、ギャラリー、レストラン、カフェ、図書館、ホール(一、〇〇〇人収容)

など市民に開放された公共施設が設けられ、実際に近隣の子ども園の子供たちが芝生広場に遊びに来ていたり、レストランでは地域の人たちが食事会を開くなど日常的に利用している風景が展開されていた。計画段階から市民と学生が植栽計画や地域図書館活動などを協働して進めており、建設工事には大学の講座として市民参加型のゲーディング講座や、里山の苗木(新名神高速道路工事によって失われた里山)をキャンパス敷地内に再生する里山ボランティア活動などを開催し、大学教職員、学生、市民が一体となった活動を通して、しっかりと地域に根差したキャンパスとして定着している。

内部空間では学生たちの学びの場としての魅力も随所に見て取れた。大屋根と屋内外テラスを持つ、公園に面した「コンコース」と呼ばれる明るい主動線空間には、授業の合間に学生が溢れ活気に満ちていると同時に「コンコース」に設けられた各コーナーがヒューマンスケールで展開しており、掲示板や家具が学生たちの思い思いの活動をサポートし、情報発信の場としても機能している。

また、教育施設の特徴を活かした、利用者に行動を喚起させ効果を体感してもらうような仕掛けとしての穴あき波型鋼板耐震壁と複合断熱障子など、環境性能と耐震性能を融合し、独自に開発したダブルスキンのガラスファサード外



緑豊かなキャンパス



BCS賞は、建築の事業企画・計画・設計、施工、環境とともに、供用開始後1年以上にわたる建築物の運用・維持管理等を含めた総合評価に基づいて選考し、建築主・設計者・施工者の三者を表彰する建築賞です。この賞は、1960年にはじまり2019年で60回を数えました。

《2019年 第60回 BCS賞受賞作品》愛知県立愛知総合工科高等学校／赤坂インターシティAIR(赤坂一丁目地区第一種市街地再開発事業)／OIST 沖縄科学技術大学院大学 フェイズ1／太田市民会館／オーディオテクニカ本社／GINZA SIX／新発田市新庁舎／新山口駅北口駅前広場「0番線」・南北自由通路／東京ガーデンテラス紀尾井町／東京ミッドタウン日比谷／富山県美術館／ナセBA(市立米沢図書館・よねざわ市民ギャラリー)／HIRAKATA T-SITE／フェスティバルシティ(中之島フェスティバルタワー(東地区)、中之島フェスティバルタワー・ウエスト(西地区))／立命館大学大阪いばらきキャンパス



建築主より

Message from Client

学校法人立命館  
理事長

森島朋三 Tomomi Morishima

### Borderを超えて～人と人をつなぎ、大学と街が一つになる

「塀をなくしましょう」。その意見でまとまったとき、それは大阪いばらきキャンパスで実現したい「キャンパスの未来像」がみえた瞬間でした。塀がないから、活発なコミュニケーションが生まれます。塀がないから、学生のアクティブな学びが街に広がり、コミュニティの活性化につながります。塀がないからこそ、街の方々が学生の活動を温かく見守ってくださり、隣接している公園で遊ぶ子供たちをみんなで守る気持ちが育まれます。

「塀をなくす」、このことから生まれた新たな視点を私たちは大切にしています。大学と街に境界(Border)は不要です。開設して5年、大学(学生)と街は、それぞれが互いをよく知るようになってきています。

「立命館のファンになってほしい」。その想いは、これからも立命館大学大阪いばらきキャンパスの原動力です。



設計者より

Message from Architect

学校法人立命館  
キャンパス計画室 室長

及川清昭 Kiyooki Oikawa

### 公園と一体化した、街のようなキャンパス

「地域に開かれたキャンパス」の実現を目指して、「学びの軸」と「市民交流の軸」という直交する2軸を基本骨格として大学施設・防災公園・市民開放施設を配置しました。

4層にわたる主動線としての「コンコース」を設け、大屋根やテラスによる縁側空間を付随させて公園との連続性に配慮し、また、「キャンパス全体をラーニングプレイスに」をモットーに、多種多様なcommonsを随所に散りばめ、主体的な学びの場を設えました。新しい環境配慮型建築手法も積極的に取り入れるように心がけています。

家具やサインからランドスケープに至るまで、設計者も含めた各種委員会や教職員・学生・地域住民とのワークショップなど、数多くの学内外関係者による参加と協働によって実現しました。キャンパスが地域住民とともに街のように育まれていくことを期待しています。



施工者より

Message from Builder

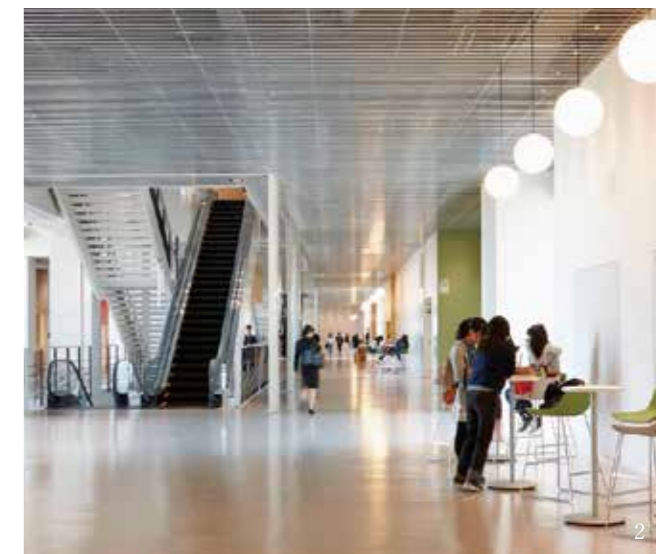
株式会社竹中工務店  
大阪本店 専門役

江藤泉 Izumi Eto

### 地域と一体となったキャンパスづくり

大阪府茨木市に新たな交流拠点として、教室、研究室、図書館、大ホール、レストラン、スタンドと多用途の6つの建物で構成された総合キャンパスを、周辺のインフラ開発工事と並行して21か月で開学させる短工期大規模工事でした。広大な敷地を利用し躯体のサイトPCa化、外装パネルのユニット化等により省人化、安全・品質・生産性の向上を推進しました。また、杭掘削残土の場内再利用や周辺開発工事との地盤レベル調整により、ダンプ予定運搬台数を大幅に削減し、環境配慮と安心安全施工に徹しました。

今、行政、建築主、設計者、施工者そして地域の皆様と一体となったものづくりに携われたことに喜びを感じ、今後とも、多くの学生と市民が交わり賑わいを見せるキャンパスへと更に発展されることを願っています。



1. 市民が集う公園とキャンパス  
2. 全学部共用空間となる2階コンコース  
3. 成人式など地域にも開放される1,000名収容のホール  
4. 耐震要素でありながら光・熱・風をコントロールする環境外皮

立命館大学大阪いばらきキャンパス 計画概要	
●建築主	学校法人立命館
●設計者	学校法人立命館キャンパス計画室 (株)山下設計 (株)竹中工務店
●施工者	(株)竹中工務店
●所在地	大阪府茨木市岩倉町2-150
●竣工日	2015年2月28日
●敷地面積	98,331㎡
●建築面積	29,956㎡
●延床面積	110,202㎡
●階数	地上9階、塔屋1階
●構造	鉄骨造、一部鉄筋コンクリート造、 鉄骨鉄筋コンクリート造

「選考委員」 赤松佳珠子・青木茂・河野晴彦

装が建物に特徴を与えている。このように、地域施設と一体化されたキャンパスの運用は、キャンパス開学と共に開設された地域連携室が担い継続的な施設運用を行っている。ここまでに都市に開いた構えを作り、運用していくことは、行政、事業主体、設計者、施工者、全ての関係者間で目指すべき高い到達点が共有され、丁寧で綿密な協議を積み重ね、強い意志を持ってその協力体制を維持し発展させていくための不断の努力なくしては到底実現し得ないことであり、その成果がキャンパスで実際に展開されている学生や地域の人々の活気あるアクティビティや明るい笑顔に表れている。このような地域住民の日常利用と学生活動の魅力の共存は、今後の日本における大学キャンパスの在り方を示す新たなモデルとして大きな意味を持っておりそのチャレンジと成果が高く評価された。